



写真：インディアナサイトにて



写真：ワシントン D.C. サイトにて

# 第5章

## 参加者の声

新井 良子

JASCとは、いったいなんだったのだろうと会議が終わった今でも思う。

この「声」を書いている間も、これを書くことによってある一側面で自分にとってのJASCをまとめた気になってしまうのではないかと、危惧する気持ちもある。

正直、わからないのだ。JASCがなんであったか。そして言葉にできないのだ。JASCでの日々を思い返すと、私の心は忙しく動き回るから。

合格通知をもらって信じられない思いで始まった春、そこからいろんな毎日が変わっていった。読む本が変わった。生活スタイルが変わった。ものの見方が変わった。

春合宿に参加して、どの参加者の目も輝いていた。誰もがいきいきしていた。そしてECがどれだけ私たちひとりひとりを悩みながら選んでくれたかを思い知った。

一緒に受験して（私よりもずっと受かってほしかった人）一緒にJASCに参加することを楽しみにしていた人と一緒に参加できなかったことがわかったときから、私でよかったのか、という思いはずっと離れなかった。何かしなくちゃ、JASCの役に立たなくちゃ、そればかりが先立って、プレッシャーで押しつぶされそうになった。

けれどそんな思いとは裏腹に日本での本会議までの毎日は飛ぶように過ぎて、JASCの醸し出す独特の雰囲気はときにこのプレッシャーをあおった。日本語でも伝わらないことがあると知って啞然としたり、自分の気負いに息苦しさを感じることもあった。こんなに自分の厭な部分を見たのは初めてだった。しかもこの感情にどう対処しているのかわからなかった。ただ、苦しかった。

この閉塞感がピークを迎えたのが直前合宿。楽しみは消え、本会議は不安でしかない涙がこぼれた。

飛行機で再び反省し、さんざんネガティブになった私を迎えてくれたのはAmedelesの笑顔だった。JASC songを歌って出迎えてくれたAmedelesを見たら、とうとう会えたんだ、という思いと、こ

こから私たちがJASCの伝統をつないでいくんだ、という思い、そんないろいろが入り混じって、心が揺さぶられて涙が出た。泣いてばかり。

所属した分科会地域再生はみんながみんな個性派揃いといわれたが、やる気と向学心と思いやりのある、素敵に分科会だったと思う。RTリーダーは忙殺される日程の中、身を削って分科会を支えてくれた。英語が苦手な私にいつも助け舟を出して理解を支えてくれたり、分科会が回るようにさまざまな工夫を凝らしてくれた。

特に本会議中の思い出に残るエピソードはフォーラムでの質問をRTメンバーのAmedeles全員が添削して背中を押してくれたこと。忘れられない一日となった。

毎日が刺激的だった。毎日が冒険で発見にあふれていた。毎日、新しい仲間の新しい部分に出会い、新しい自分に出会い、それでいて自分のコアに近づくような気もした。

こうして書いていると、JASCが本当に終わってしまったのだという事実が突きつけられる。そしてとても、悲しくなる。どうしようもなく。私たちは62nd Almuniになってしまう。

ひとつだけいえるのは、あの日々が明らかに非日常だったこと。そして、そこで出会った仲間は、私たち自身の人生のみならずきっと世界ごと変えるパワーを持っているということ。若者の戯言じゃない。たぶん本当にそうなる。

私の大切にしているお茶の言葉で「一期一会」というものがある。JASCで得た「一会」は未来につながる「一会」だ。それきりで終わりなんていうことは絶対に、ない。でも、あの非日常は確実に「一期」だった。あの場で出会ったことにはきつと、大きな大きな意味があるのだろう。

まだ、わからない。けれどいつかわかる。

その日までそれぞれがそれぞれの夢を持って、多種多様な舞台上で活躍して、またいつかあの頃の写真を見せる日が、私はほんとうに待ち遠しいのだ。

## 有川 慧

アメリカでの一ヶ月は本当にあっという間だった。日米70人の学生が作り出す笑いの絶えない空間はあまりにも心地よく、帰国してからというもの、日本の生活に上手く溶け込めてない自分がいる。毎日のようにコーヒーと栄養ドリンクを飲み、たわいの無い話に抱腹絶倒した思い出の一つ一つが、今でも私の心に鮮明に残っている。一ヶ月という限られた期間の中で、私は異なる価値観を持つ人々と出会い、またディスカッションやフォーラムに参加することにより強く刺激を受け、様々なことを学ぶ機会を得た。

私が日米学生会議に参加した第一の理由は、「平凡な日常から抜け出し、新しいことに挑戦したい」と思ったからである。そして、自分と全く異なる分野を専攻し、また異なる人生を歩む学生が、日々起こっている社会問題に対してどのような問題意識を持っているのか、新たな観点を得たいという思いがそこにはあった。これからどんなJASCerに出会えるのだろうか—そんな期待抱きつつ参加した春合宿。初めて会った日本側デリゲーツは私の想像した以上にユーモアに溢れ、濃いキャラクターの持ち主が多く、初対面にも関わらずすべてをさらけ出す彼らのオープンさとテンションの高さといったら忘れられないものがある。本会議で私が出会った日米合わせて70人のJASCerたちは、一人一人ユニークで意識が高く、情熱溢れる議論をする学生ばかりであった。

分科会では、環境という幅広いテーマの下、9人のデリゲーツの持つ様々な価値観から一つのものを作り出すということの難しさを実感した。医学や経済学、工学など、多様な切り口から生まれる問題意識から一つの結論を導くこと自体、そもそも間違いなのではないか—最終発表までの限られた時間の中で、各自の関心のある程度妥協しなければならぬという現実、以前から「あれも議論したい、これも議論したい」と胸を膨らませていた私をひどく歯痒い気持ちにさせた。また、今まで専門家によって議論し尽くされてきたものにも関わらず、未だ解決法が出されていない

環境問題を、自分の問題として考えることが如何に困難であるかということに改めて思い知らされた。政治家でもなければ研究者でもない我々学生が一ヶ月間話し合ったところで、この問題を解決することは可能なのか—諦めの念が私の脳裏を過ることも幾度もあった。JASCerとしてできること、役割とは何だろう?この問いは本会議の間、常に私の頭を悩ませた。

JASCを通して私が何を得たか、人々に何を与えたかを説明することは難しい。まだ自分の中でもこの一ヶ月をリフレクトしきれていないものもあるだろう。ただ一つ確かなのは、JASCで得た刺激や貴重な経験はきっかけにすぎず、これを生かすためには自分たちで掲げた問題についてこれからもずっと考えていく必要があるということである。JASCの終わりはファイナルフォーラムでもなければ、本会議最終日でもない。私はただ「楽しかった!」という一言でこの経験を終わらせたくないのである。

これからの将来を担う人材として、実現が困難かつ差し迫った問題に自ら立ち向かうということは、多大なる勇気を必要とする。今までその問題から逃げてばかりいた自分が、JASCのメンバーとして、日本とアメリカの学生の代表として議論の場に立つことで、数々の困難にぶつかり、また多くのフラストレーションに悩まされた。しかし、この会議を通し、苦しみの中でも諦めず、たとえ偉大な功績を残すことはできなくても、その問題と真正面から向き合い自分たちの問題として考えることの大切さを知った。日本とアメリカが互いに協力し、その小さな努力を積み重ねることによって、我々の住む社会に変化を齎すことができると信じている。

最後に、この第62回日米学生会議を作り上げてくれたECの皆、いつも支えてくれた環境分科会の皆、その他サポートをしてくださった全ての人々に感謝と敬意を表したい。本当にありがとうございました!

### 飯倉 江里衣

誰にとっても貴重な夏休みの1ヵ月、或いは日本での事前活動を含めた4ヵ月、またECにとっては1年半近くをJASCに注いだことはどれだけの意味を持ったのでしょうか。私にとっては、特に1ヵ月の本会議を通して、自分にとってのJASCの持つ意味が大きく変化しました。学部時代とは異なり、自分の研究と論文に集中した学生生活を送る私にとって、ECのようにJASCに長期間尽くすということは考えられず、なぜそこまで熱心になれるのかということが理解できませんでした。しかし、本会議を終えてみて私もECを経験してみたかっと思えるほど、気づけばJASCが大好きになり、私の中でJASCの存在がとても大きなものとなっていました。

私が感じたJASCの良いところは、学年や年齢、出身、国籍、人種、信条、様々な価値観や考え方を超えて一人一人が相手を理解しようとする場であることです。ありのままの自分を受け入れてくれる仲間がいて、自分自身もそういった姿勢を知らず知らずのうちに身につけられる場です。そして自分の良いところや悪いところを含めて理解してくれる仲間がいるからこそ、自分が素直になれる場でもあります。笑いたい時に笑い、怒りたい時に怒り、泣きたい時に泣き、苦しい時や困った時にはそれを隠さないでも周りが助けてくれる、お互いがお互いを助け合い補い合える場なのです。更にそうした1ヵ月、若しくはそれ以上の密度の濃い時間を共に過ごし、一生付き合える友人に出会えるのがJASCの最大の魅力でもあるでしょう。私がこれからのJASCやJASCerに望むことは、諦めず自分の中でとことん考え抜くということです。これは本会議前の事前学習から心掛けて欲しいことです。そして、本会議でこれを伝えたい！これを言いたい！という自分の気持ちを持って行くことをして欲しいです。更に自分を最大限に相手にぶつけ、他者との衝突や対話を通じて自分自身ともしっかり向き合うことが大切だと思います。一人一人が満足のいくRT活動のために、RT活動の在り方を考え直すことも今後の課題として

必要かもしれません。何らかの達成を目指し、その後のJASCや自分達に繋がるものを作り上げることも提案の一つとして考えます。私はこれからもJASCで知り合った仲間達と親密な関係を保ち、世界の様々な問題について共に考え、またその重要性をこれからのJASCer達にも伝えていきたいです。

### 井上 聡美

私が日米学生会議を通して目指したものは「自分」を見出すことである。私は日米学生会議に参加するまで自分に自信がなく、他者の視線や考え方をいつも気にしていた。他者の評価や意見によって自分が形成されているように感じ、その周りから作られる自分という像に違和感を覚えていた。周りに左右されない、何か確固としたほんものの「自分」の像を掴みたいと思い、この日米学生会議に参加した。

そのような目標を持つ私にとって、分科会は目標を達成する絶好の場であった。そのため私は学生の社会参画分科会の中で自分の意見をはっきりと持つこと、そしてそれをしっかりと主張することを重視した。当然そこで分科会のメンバーとの意見のぶつかりは生じ、議論は私の思った方向から外れていってしまうことがたびたびあった。私は自分の意見を分科会のメンバーにわかってもらおうと、決して流暢ではない英語で精一杯説明したが、その思いは必ずしもいつも通じるわけではなく、何度も何度も悔しい思いをした。しかし一方で意見がぶつかるたびに嫌でも他のメンバーの意見に向き合って理解し、そしてその意見と自分の意見を照らし合わせまた新しい自分の考え方を発信していかなければならず、意見がぶつかるたびに自分の意見はより深いものとなっていった。

その時私は、他者に左右されない「自分」をほんものの「自分」だと思っていた私自身の考え方がいかに愚かで意味のないものであるかに気づいた。「自分」というものは他者と関わることによって深まっていくものであり、変化していくものであること。そしてそれが自分を形成してゆくこと。

そして「自分」を深め、変化させてくれる他者の存在に感謝して生きていかなければならないこと。ほんとうはそれらが大切であることに初めて気づかされた。今回の日米学生会議では分科会活動に限らず多くの「他者」と出会い、多くの「自分」に出会った。多くの妥協をし、多くの新しい考えを見つけた。このたくさんの発見の中で確実に私の考え方は大きく変わり、見える世界が明るくなったように思える。このように私を変えてくれたすばらしい「他者」たちに感謝したい。第62回日米学生会議のみんなに、ありがとう。

### 大井 芳季

「やはり非常に空白感を感じる。単なる時差のLAGだけではなく、それ以上に強烈なLAGだ。けど、これほどの空白感があるというのは、それだけ昨日までが強烈な impact だったということだろう。そしてそれこそ正に自分が欲していたものかも知れない。」

この報告書を書くために、JASC 中の日記を読み返していたら、最後の日付(帰国した夜)の日記の中にこう書いてあった。(ところでJASC 中の日記にはこのように中途半端な英単語が無意識に混じっていてどうも可笑的)。

終わって直後の、消化される前の感情をそのまま書いたものだ。なので、少し時間が経った今、自分に「C」(= Clarify; 内容を平易に説明すること)してみようと思う。(本会議中、米国側参加者にCを大量に要請した記憶があるが、自分がCする立場になるのは今が久しぶりである。うーむ。)

一つ目のCは、何が「強烈な impact」をもたらしたのか?ということ。大きな要因は、個性的なメンバーが二十四時間一緒に居ること。今アパートでPCを打っている環境からは想像もできない。そして、最大の要因は、何でも挑戦できる環境だと思う。「一秒も無駄にしたいくない」という想いを多くの人が持っていたと感じる。専門外のテーマでも議論の司会に立候補してテーブルをリードしたり、講演会のQ&Aで失礼覚悟で率直な疑問を聞いたり、お互い知識不足は認めつつもルームメ

イトとハイエクの思想について議論したり、歌の経験は無いがタレントショーでボーカルをやってみたり、及び腰にならない限り何でもできる。失敗しても誰も蔑まないし、それどころか今の自分の弱点/課題はここなのだナという発見が次々もたらされる。

二つ目のCは、「正に自分が欲していた」とは?ということ。当初の参加目的は二つ。一つは培った議論力や知識を試したいということ。二つは経済学をやっていると大きな存在感で迫ってくるアメリカという(少し面白い)国で、市場主義やリベラリズムが、普通の人、特に学生の間でどう捉えられているか議論したいということ。これら二つの目的には、大きな手応えを得られたのは確か。そしてそれに加え、前述の「impact」に満ちた生活、そこで得られた自分の課題の発見や仲間が、予想以上に非常に素晴らしいものだったといことだろう。

以上、自分にCを試してみた。そうして今見返すと、「空白感」という表現に違和感を覚える。今は寧ろ、前向きな姿勢と力が手元にあるのを強く感じる。

### 大宮 透

「自分にとってのJASCとは、いったい何だったのだろうか。」

おそらく、参加者感想を書くにあたって、殆どのJASCerたちが自問自答してきただろうこの問いを目の前にして、私は今なお、その答えに窮している。何か「もっとも」らしい答えを必死にひねり出そうとしては、これまで幾度となくパソコンの前で途方にくれ、髪の毛を掻きむしる日々を送ってきた。どうしても、うまく感想が纏まらないのだ。

1年間にも及んだ実行委員としての活動を経て、昨年とは比較にならないほどJASCについて詳しくなったはずの自分が、いったいどうして感想ひとつ纏められないのか。私なりに思いを巡らせていくうちに、最近その理由がなんとなく見えてきた。

## 第5章 参加者の声

ひとつのキーワードはJASCの「内部化」だ。61回参加時点での私は、どこかJASCという団体や活動を「外側」から捉えていた。だからこそ、比較的容易に、客観的視点からJASCを観察することができたのだと思う。しかし、1年の月日は、JASCを私の体の一部のような存在に変え、JASCもまた、私をその歴史の一部へと迎え入れてくれた。「内部化」されたJASCを、客観的な視点で捉えることは非常に難しい。これが1つ目の仮説である。

もうひとつは、私自身の「変化」である。この間、本会議中の写真を何度も眺める中で、ひとつ気づいたことがあった。たとえ同じ写真であっても、それに対する自分自身の感じ方が、日々変化しているのだ。それと同様に「JASCとは何か」を考えてみても、その答えとなる部分や重要だと感じるポイントが、少しずつ変化してしまうのである。「情報」としての写真やJASCでの経験自体に変化がないのであれば、これは「見つめる側」としての私自身の変化を示しているのだろう。この事実は私にとって喜ばしいことである反面、故に感想文を書き上げても、次の瞬間にはなんとなく違和感を持って、それを捉えてしまうという現象が起きた。

これが2つ目の仮説である。

もしこれらの仮説が正しいのであれば、内部化されたJASCを客観的に捉え直すには、もう少し時間がかかるように思える。私にとってのJASCが持つ意義もまた、私自身の変化とともに変わっていくに違いない。70名のかけがえのないメンバーとともに過ごしたアメリカでの1ヵ月が、今後どのような意味を有していくのか。今は想像もつかないけれど、その変化を、私は精一杯楽しみたいと思う。未来のある地点でJASCを振り返ったとき、また新しい発見ができる人間であるように、私自身も前進を続けていきたい、そう思える自分がいる。

常にそこにあって、自分自身の立ち位置や変化を指し示してくれるJASCという存在に出会えたこと。出会わせてくれた友人。そして、開催を可

能にして下さったすべての人々に感謝の意を表して、私の感想文としたい。本当に、ありがとうございました。

### 奥谷 聡子

渡米してすぐにEarlham Collegeに到着した時、アメリカの学生がJASCソングを歌い、日本人学生を温かく迎えてくれたのを今でも鮮明に覚えている。あの時、初めて70人全員が集まり、日米学生会議はいよいよ始まったのだと実感した。今振り返ると、1ヵ月間の分科会活動は本当に充実しており、一生の友人に出逢うことができた。しかし、そこに辿り着くまでは決して楽しいことばかりではなく、多くの困難にも直面した。最初は皆自分の意見を出しきれておらず、第二サイトまで順調に進んでいたかのようにみえた議論も第三サイトからはファイナルフォーラムの発表内容や形式について議論は行き詰まった。更に分科会内でうまく英語でコミュニケーションがとれずに何度も同じ議論の繰り返しが続き、メンバーのストレスは限界まで溜まり、ある時点では諦めの雰囲気は漂った事もあった。そんな時、私は言語の壁を越えて一生懸命に意見を伝え、理解しようとしていた日本とアメリカメンバーの姿に何度も励まされた。だからこそ、どうにも抜け道のないように思えた案もそこから妥協案を考え出せないか、私は諦めずに提案し続けた。その結果、全員の当初の思い通りの最終案にはならなかったものの、全員の意見が反映された素晴らしい最終発表ができたことを確信している。今年のテーマにもある「衝突と共鳴」という言葉だが、私がこの1ヵ月から学んだ事は、理解するということは時に妥協するという事でもあり、どんなに解決不可能にみえる問題に直面した時も諦めずに理解し、伝えようと努力し続けることが最も重要だと感じた。お互いに理解しようとするのを止めた時点でその問題の解決策は二度と見えてこない、同様に自ら学ぶことを止めた時点でその人の成長はそこまで終わってしまう。国籍も言語も違う学生が共に過ごし、様々な問題について議論する日米学生会議の意義とは何か考

えてみた。特定の利害関係に縛られない学生だからこそ、そのような立場に縛られている人々が率直に話し合えない、タブーとされている繊細な問題についても学生レベルで正面から堂々と議論し、理解し合い、その後には何もなかったかのように笑顔でジョークを交わし、友人としてお互いを尊重し合えることなのだと思う。最後に、国際教育振興会をはじめ、実行委員の皆さん、会議の実現にご協力して下さった全ての方々にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

### 尾崎 裕哉

＜非現実の28日間＞

私は日米学生会議の最中、常に「日米学生会議だから出来る事」にこだわり続けた。だが、正直、今現在もこの夏の経験を完璧に消化しきれていないとは思えないし、納得の行く答えが見つからないとも思えない。考えてみれば、米国や欧州で10回以上夏期プログラムに参加した事があるが、この様な気持ちは実感した事がない。日米学生会議の濃密さと独自性が伺える。独自であると分かっているにも関わらず、それを私の中で言語化できはしなかった。でも確かに、この非現実の28日間は私や仲間にとって凄く重要な意味を示している。何故だろうか？

二ヶ月間の事前活動や本会議では日米同盟や沖縄基地問題等、これまで深く考える事無かった問題や、世界での日米の役割を真剣に考えるきっかけになった。この会議に参加していなければ知る由も無かった歴史を知った。そして、自分の今の限界、自分の無知さ、そして心の狭さを気付かされる様な出来事が幾度もあった。どんな時も私の頭の中でこだましていた言葉は、62回日米学生会議のテーマである「世界の問題を私達の課題へ」という言葉だった。当事者意識を持つ事の難しさと同時に真義を問う事の大切さを学んだ。そして、より良い世界の共創はそこから始まるのだと強く感じるきっかけになった。

日米学生会議は「Life Changing」を唱っているが、参加して数日が経つ今だからこそ、これは嘘

ではなかったと言える。自分を含め、70人の参加者それぞれが会議参加前と後の顔つき、物事に対する姿勢が変わっている事は間違いない。自分では気付かない様な小さな変化から実感出来る大きな変化まで、幅広い変化を遂げた仲間達を私は目の当たりにしてきた。日米学生会議はこれまでの世界観を変える気付きの場であると同時に、人生において重要な絆を築く場であると言えるだろう。沢山の気付きの中には、挫折を味わう様なものもある。しかし、それを乗り越える事が出来たのはJASCという特別な場に集められた、頼れる仲間達と共に悩み、共に議論し、共に歩む事が出来たからかも知れない。私は彼らと世界を駆け抜けた。

日米学生会議とは、成長する会議である。時代の背景と共に分科会も、理念も、そしてプログラムさえも変化し続けてきた。会議は毎回姿を変えていて、前に習い、全く新しいものへと毎年進化し続けてきた。でも根本にある、「学生視点」という核は変わらない。学生が学生の為に、沢山の支援を頂きながら、創り上げている。JASCでしか出来ない事、それは本当の意味で学生同士が掛替えの無い青春を共に創る事だと思う。そして、私はこの伝統の一部になる事がとても光栄に思える。

### 郭 ヒギョン

3回生の夏に参加した第62回のJASCは、自分にとって大きなチャレンジだったと言っても過言ではない。合格すると全然思えなかったきびしい選考の瞬間から、JASCの本会議が終わって振り返ってみる今の瞬間まで全てがあっという間で夢のようである。日本全国での学生と全米から集まった学生で70名近い人数が、毎日24時間を一緒に同じ場所で生活し、アカデミックで議論を行うという経験は誰にも接しやすいものではないだろう。個々人が持つ個性もバックグラウンドも様々で、皆の経験を聞くだけでも楽しい環境がJASCだった。しかも、高いモチベーションを持っている彼らと話していると、何気ない会話からも学べる事が多くあり、そうした何気ない会話からいつの

## 第5章 参加者の声

間にか深い議論になっていく雰囲気も JASC の魅力ではないかと思う。5月のGWに行われた春合宿から6月の沖縄研修、7月の直前合宿、アメリカでの本会議などのメインイベントだけではなく、RT 関連の FT、事前勉強の一環としての勉強会、様々な講演会やフォーラムへの参加など、事前準備にも力を注いだ。また、ML や Skype を大活用し、時間・空間を超えてアメデリとの事前活動をしたことも、非常に勉強になった。しかし、何よりも JASC の最も有意義なところは、その活動が本会議中だけにとどまらず、そこから得られたものを自分の人生にどうやって生かしていくか悩むきっかけ、そして一生の仲間に出会えたことだと思う。こうした大事な経験を与えてくれた JASC に何かで貢献できるように頑張りたい。

### 片山 直毅

JASC を知った経緯はもう忘れてしまったが、HP で第 62 回のテーマ「世界の問題を私たちの課題へ～異なる個の生む衝突と共鳴から～」を目にした時の衝撃は、今でも忘れられない。それまでの大学生活に、どこか物足りなさを感じていた自分にとっては、心の奥に秘めていた何かを揺り動かされるような、そんな衝撃だった。「本気で語り合える仲間と出たい。」帰国生でもない、留学経験もない自分には縁遠く感じられながらも、この思いが自分を動かした。参加が決まり、期待が日増しに膨らんでいく一方で、歴史と伝統があり、多くの企業や財団、そして OB の方々に支えられているこの会議の意義と、参加者としての責任について、考えるようになった。事前活動で訪れた防衛大学で、如何に国を守るかを日々学んでいる防大生や、普天間米軍基地から飛び立つヘリが、頭上を行き交う沖縄国際大学に通う学生達と語った時、私は、同世代の彼らの眼差しが突き刺さるような感じられた。“日本の代表として” アメリカに向かう学生。私たちは彼らの目にはそんな風に映ったのかもしれない。そんな経験から、「JASC の意義とは何か、JASCer としての責任とは何か。」しばらくこの問いが頭から離れなかつ

た。というより、早くその答えを見つけなければ、という強迫観念すらあった。しかし、会議を終えた今振り返ってみると、そのような問いにあまり意味はないということに気がつく。JASC の意義も、JASCer がそこから何を得たのかも、人それぞれである。私にとっての JASC の意義は、「本気で語り合える仲間との出会い」という一言に尽きると思う。始まる前からそうだったし、終わった今も変わらない。“世界の問題を私たちの課題”として取り組むためには、もうしばらく時間がかかる。しかし、この JASC で出会った仲間や培った経験は、この壮大なテーマに挑戦するための糧になる。その意味で、JASC はまだ終わっていないし、JASCer としての“責任”はこれからの人生をかけて果たすことになるのだろう。

Once a JASCer, Always a JASCer.

### 加藤 梓

<小さなことの積み重ねという教え。>

一年間かけて作り上げた第 62 回日米学生会議が終了した。今の自分の気持ちを上手く表現できないのが率直な感想だ。嬉しいのか、悲しいのか、悔しいのか、寂しいのか。全てなのかもしれない。自分の気持ちを整理するまでにもう少し時間がかかりそうだ。

日米学生会議から学んだのかを考えても、答えが出ない。友好関係が危ぶまれている中で感じる事が出来た日米間の絆の強さ、参加者の一人一人の表面上に見えない強さ、何か不具合があった時に自分から行動しようという責任感、信頼されるためにはどれほど努力が必要で、どれほど難しいことなのか、心を許せる友人を持つことがいかに幸せか、私という一人がどれほど無力で、どれほど周りに支えられながら生きているかなど多数のものが頭をよぎる。

言葉にしようとする大切なものが表せなくて、心が苦しくなる。

理念の決定から始まり、広報、財務活動、選考、コンテンツ作成と 8 人の JEC と 8 人の AEC と共に一つ一つの JASC のパーツを作り上げてきたこ

の一年間は、私にとって自分を崩し、固める繰り返しだった。形の見えない、正解などないゴールに向かって16人で右往左往しながら一步一步進んでいった。

今思えば私達が通った全ての道の重みを感じられるし、物事は小さなことの積み重ねで作り上げられていくのだということを痛感出来る。日米学生会議を企画運営していくことも、信頼を得ることも、そして今後の日米関係に関しても、同じことが言えるだろう。

日米関係が危ぶまれていると騒がれている中、日米学生会議のような学生の小さな動きの積み重ねが求められるのだと思う。アメリカと日本という国単位で見るとは、マリアマと梓がというように、個人単位で見ることが今後より必要なのだと思う。鈍感さと勢いと不完全な面をたくさんもっている学生だからこそ小さなことの積み重ねで大きな影響を社会に起こす可能性があるので考える。

1934年から始まる日米学生会議は62回分の参加者の強い絆を結ばれている。何十年も前の参加者の想いを背負いながら、受け継ぎながら私達はこれからも毎年開催していく。

私は第62回日米学生会議の実行委員として、いつまでも日米学生会議を守り続けていきたいと思う。今まで日米学生会議を守ってきて下さったOBOGの方々、あらゆる面でご支援して下さい下さった方々、私を選んでくれた第61回の実行委員、第62回の参加者全員、そして最後にこれからも日米学生会議を守っていくと決断してくれた第63回の実行委員に感謝の気持ちを記しつつ、私達が作り上げた第62回日米学生会議を心の宝箱に大切にしまいたいと思う。

### 木本 篤茂

日米の優秀な学生にもまれながら、JASCでしか行けない場所にいたり、ここでしか出来ない経験を積んだりするという目的をもって参加していたが、その目標はよく達成されたと思う。「優秀な学生」という点に関して言えば各人が1ヵ月間

専門的に学ぶ分科会のトピックに関するものでないディスカッションでも意見が途切れることなく飛び交ったことに象徴されるように、常日頃から様々な社会問題に目を向け、情報収集をし、自分の頭で考えることに慣れている人が多く、真剣なディスカッションの場や日常のちょっとした議論からも刺激を受けることが多かった。またJASCでしか出来ない経験と言う意味では、米国の国務省に入ったり、ニューオーリンズ復興の一環として家を建てる手伝いをしたり、といったことが出来たのは本当に有意義だった。

またそういった特殊なイベントとは別に、街中では環境意識、貧富の差の大きさ、サービス意識など様々な分野で日米の差異を感じる事が出来た。現地にいったからこそ肌で感じる事が出来るものだったと思うのでアメリカに行ったことの意義が感じられた。

### 栗原 隆太郎

第62回日米学生会議に参加できたことは、今後の人生にとって大きな糧となり、大きな影響を与えてくれるであろう事を確信している。特に印象に残った事について述べていきたい。

まず初めに、分科会活動が非常に思い出深い。「安全保障と日米」という非常に大きな分科会のテーマだったが、本会議前のジャパデリだけの事前活動、様々な人にお話を伺ったフィールドトリップ、本会議中のアメデリ、ジャパデリ共に繰り広げた数多くのディスカッション、その全てが私の興味分野である「安全保障」について多くの新しい視点、刺激を与えてくれた。分科会のメンバーとは時にぶつかる事もあったが、学生だからこそ、JASCだからこそ、お互いの本音をぶつける事ができたのだと思い、そしてそのような貴重な経験をさせてくれた分科会メンバーのみんなに感謝したい。

分科会メンバーをはじめとした、JASCer達との日々の会話やスペシャルトピックでの意見交換も大変印象に残っている。日本の政治の問題点やオイルスピルについてお互いの意見を交換したこともあれば、アメリカ史上最高の作家やベースボー

## 第5章 参加者の声

ルの素晴らしさについて熱く語られた事もあった。一ヶ月も一緒にいれば、真面目な話題からふざけた話題まで色々な事を話す事が出来る。確かにまだあまり話していない参加者もいるが、69人と思いついた時すぐに語り合えるという”非日常”がJASCにはあった。それがすごく楽しかった。

最後に、JASCに出て一番良かったと感じるのは、ベタではあるが、69人の新しい友達が出来たことだ。分科会でどれほど安全保障について語ろうか、著名な人から為になる講演を頂こうか、JASCが終わったあと一番心に残っていたのはJASCで出来た友達の存在だった。例え一ヶ月という短い時間でも、寝食を共にし、時に真剣に、時にふざけて語り合った友達はこれからの自分の人生に多くの良い変化をもたらしてくれると思う。そんな友達に会えたことが、JASCに参加して良かったと心から思える何よりの根拠だ。ありがとう！

### 齊田 英恵

アメリカで過ごした本会議は私の人生で最高の一ヶ月となった。楽しかったことは多かったが、それだけではなかった。辛いことや悩んだこともあった。しかしみんなの助けを借りながらそれらを解決していき、その分成長できた。自分がこれまで生きてきた環境とは全く違う環境で育ってきた69人と出会えた日米学生会議(以下JASC)は私にとって人生の交差点のようなものだった。ここに参加しなければみんなに決して会えることがなかったかと思うと、JASCの経験がいかに貴重なものか実感する。それぞれの個性を尊重し合い、妥協せず本音で話せるみんなは私の一生の宝となった。

JASCへの参加は私にとって挑戦だった。今までこのような学生会議に参加したこともなければ、他分野の人と同時に議論したこともなければ、自分の考えを相手の考えと衝突して共鳴させたこともなかったからだ。それでもJASCのパンフレットの裏から聞こえてくる歓声、伝わってくる熱気に一途にあこがれ、一員になりたいと思い参加を

決意した。合格通知をもらったときの喜びの後は、実は不安の連続だった。この貴重な経験を最大限生かさなければという気負いと大学との両立をさせることは、自分との闘いだった。

私はこのJASC参加の目標として、国際問題の議論に関して自信を得ることをあげた。将来につながるような自信を得たかった。しかし分科会(以下RT)の中でそれを形成することは、初めは難しかった。自分の考えが浅いため他のメンバーの主張に押され自分の考えが見えなくなってしまうたり、勉強不足のため議論に加われなかったりしたからだ。しかしメンバーと米国4都市で時間を共にするにつれ、同じRTのメンバーによって自分の自信が支えられているのを実感した。英語での議論の内容を全員で確認し合ったり、誰かが発言の内容をわかりやすく言い換え合ったりした。お互いの成長を喜びあえる、信頼しあえる仲間だからこそそれが可能になったのだろう。

自分とは専門や生きてきたバックグラウンドが違うJASCで出会った69人から、異なる価値観、考え方など多くのことを学び、吸収した。しかし得られた多くのことを消化し自分のものにするまでは至っていない。最高に楽しい1ヶ月はもう終わってしまったが、私のJASCは今でも続いている。今後は自分の専門性を追求するとともに、他分野にも理解を深め、考えをブラッシュアップし、みんなと考えを共有し合っていきたい。

本会議が終わり、1週間経った。大海原にぼつんと一人いる気分だ。この後どこへ進むかは自分次第である。しかし、JASCを通して自分の指針を示してくれるツールや仲間ができた。あとは自信を持って進もうと思う。

JASCのみんな、JASCを支えてくださった方々、大学の先生、友人、家族、私を支えてくださった方全員に感謝を伝えたいです。ありがとうございました。

### 齋藤 友理絵

振り返ると、アメリカで過ごした1ヶ月は、本当にあつという間の出来事であった。些細な冗談

から真剣なディスカッションまで、今の私にとっては全てが宝物だ。多様なバックグラウンドを持った学生たちが、JASCerという平等な立場と機会を与えられ、切磋琢磨しながら成長する。そこでは、全員が自分以外のメンバーに対して尊敬の念を持っていた。全員が他者に対して自分を表現する能力を持っていた。たまたまバスで隣に座った人と、ルームメイトと、人生や自分の悩みについて、会議の疲れも忘れ、時間の許す限り、いつまでもいつまでも話していた。たくさんの「あのときのあのひととのあの時間」を積み重ねて、今の私がある。そして、そのひとつひとつがかけがえない財産だ。

私は参加者唯一の防衛大学校出身であり、安全保障に関する分野において意見を求められる機会が多かった。必ずしも正確な論拠に基づく回答が出来ない悔しさや、自分のアイデンティティについて考えさせられると同時に、予想以上に自衛隊や日本の安全保障問題に関する知識を他の学生が持っていたことに驚かされ、議論を深めることが出来た。それは同時に、大きな喜びでもあった。JASCer達の率直な疑問が私にとっては新鮮で、彼らの一言一言に、自らが負う責任を感じずにはいられなかった。この体験を生かすためにも、近づく任官の日が楽しみである。

JASCのみならず、1ヵ月過ごしたアメリカという国についても、自分の抱いていた印象を変える契機となった。日本では考えられないほどの貧富の差が、現実として存在していた。小さな子供が路上でダンスを踊ってお金を稼いでいた。ホームレスは皆、手に手にコップを持って、また手のひらをおわんにして、1ドルをくれ、と言ってくる。路上でドラッグが吸われている。世界の大国アメリカの抱える内在的な諸問題を目の当たりにし、少なからず衝撃を覚えた。

JASCとは、集団の中の自己、自分の中の自己について深く考えることのできる場であると思う。よく言われる‘JASC is a life changing experience’とは、誰が言い出した言葉だろうか。誰がこんなにもびつたりな表現を思いついたのだ

ろうか。いや、ぴったり過ぎたからこそ、自然と共有される言葉となったのかもしれない。JASCで得た絆には、大きな力がある。短い人生における短い1ヵ月の、本当に本当に貴重な体験であった。Once a JASCer, forever JASCer! Thank you for all!

### 坂田 奈津希

「好きなものこそ追及しなさい」という言葉をよく聞く。でも、「好き」なものなんて何ひとつない私はどうしたらいいのだろう。そんなことを考えていた矢先、出会ったのが日米学生会議でした。集団、議論、英語。苦手意識を持っているものすべてが凝縮されたようなこの会議。でも、なぜかひきつけられるこの会議。自分を変えるならこししかない。そう思いながら、私はJASCerとしての道を歩み始めました。

しかし、いざ61回会議が始まると、苦手意識ばかりが募り、それらを克服することはできませんでした。拒絶されることが怖いから、嫌いといって諦める。自分がうまくできないから、苦手と言って逃げ回る。周りがどんどん前進して行く中、私は「嫌い」の一点張りで、ひとり立ち止ったままでした。「衝突と共鳴」を引っ提げての62回会議では、そんな自分を変えるべく努力してみたものの、やっぱり私は私でしかなくて、臆病で、へそ曲がり、内向きのまま。表面上でいくら態度を変えても、必ず弱くて醜い自分に戻ってきてしまいます。

しかし、この1年半で私は何も成長できなかったのかというと、それは違う気がします。JASCは、一人でいることが心地よかった自分に、他者と共に生きる喜びを教えてくれました。初めてみんなが集まったとき、すごくわくわくしたということ。不安でたまらなかった分科会も、信頼できる仲間ができて心強かったということ。本会議後すぐ試験だということに、みんなが気になって連絡してしまうということ。こんなこと、昔の私には想像もつきません。

また、「好き」も「嫌い」も「できる」も「できない」

## 第5章 参加者の声

も自分次第であることも学びました。辛いと思っ  
ていたら辛いし、無意味だと思っていたら無意味。  
でも、限られた時間の中で、ひとつひとつの出来  
事を自分のものとしていくには、自分自身が「こ  
こから何か学んでやるぞ!」という貪欲な精神が  
なければならぬ、と今では強く思っています。

結局のところ、JASCで私が何を学んだのかはよ  
くわからないままです。きっとそれは、これからの  
私にかかっているような気がします。でも、こん  
な風に思える自分が今いるのは、ECの仲間、デ  
リのみならず、そしてJASCという場に関わって頂  
いた全ての方のおかげであることはたしかです。  
これからも落ち込んだりすることもあるとは思  
いますが、JASCで学んだことを胸に刻みながら、  
精進していきたいです。大好きなみんな、本当に  
ありがとうございました!

### 柴田 真也子

日米学生会議に参加して得た最も大きな財産は、  
人との「出会い」である。会議を通じて、多くの  
新しい人間に出会い、感化された。自分とは全く  
異なる発想や意見を交わし合うことで、自分の中  
の新たな側面に気づいたり、成長したりする機会  
をもらった。何より、自分の中の惰性と可能性を  
見たことは大きかった。参加者の中には、しっか  
りと将来を見据え、それに向かって日々邁進して  
いる人たちがいた。彼らは会議だけではなく、多  
様な活動に携わっていて、そういう人間と話をす  
ることで、自分ももっとがんばらねばならないこ  
と、がんばれることに気づけた。この気持ちは会  
議が終わっても忘れたくないし、そのために努力  
したい。そして、会議を通じて得た出会いを今後  
もあたため、お互い切磋琢磨していける関係を維  
持したい。

しかし、反省点も多くある。先に自分の中の「惰  
性」と述べたが、やはり「学生」団体というもの  
の特有のぬるさみたいなものに甘えていた自分が  
いた。学生団体が悪いというのではない。学生団  
体だからこそ持ちうる尊さもある。一ヶ月間の共  
同生活は決して容易なものではない。悩む人がい

たら声をかけ、夜中まで話しをし、壁にぶつかり  
ながらもお互いを励まし合う。そこから互いを知  
り、あたたかさに触れ、人間関係を構築していった。  
このような人間関係が構築できたのは、学生団体  
の会議だったからこそである。社会に出たらこう  
はいかないだろう。すべての人間が自分の話に耳  
を傾けてくれるわけではないし、受け入れてくれ  
るわけではない。それを前提として、会議の持つ  
ていたあたたかさに気づく一方で、馴れ合いに甘  
んじている自分がいた。だから、会議に対して全  
力で望んだかと言われれば、疑問を呈する。正直  
に言えば、最初は会議自体の持つ雰囲気に対して  
不満を持っていたが、途中から自分の関わり方で  
それはどうとでも転ぶことに気づいていた。しか  
し、そのために何か大きなことをしたかと言えば、  
否である。この結果は、私が私自身と向き合わ  
なければならぬ重大な欠点要素のひとつだ。目の  
前のことに対して全力で望む、これは一生に一度  
の人生ということを考えれば非常に重要な点であ  
る。

後悔は残っているものの、会議に参加したこと  
で感じたこと、学んだこと、得たものは自分にと  
って代え難い経験のひとつとなった。この中で見  
つけたものを今後にも活かし、自らを成長させてい  
く糧にするよう邁進したい。

### 杉本 友里

近年、地方からのJASC参加者は決して多くな  
い。

今期、実行委員としての目標はいくつかあった  
が、私は特に『地方におけるJASCの活性化』に  
注力した。今回、自分が住む京都を拠点に、立命  
館大学での核問題フォーラム、同志社大学での説  
明会、京都市内の各大学へのネットワーク拡大、  
関西のアラムナイネットワークの構築など、様々  
に試みた。

結果的には、応募者の規模を見ても、合格者の  
数を見ても、まだまだ関西、ひいては地方学生の  
プレゼンスは弱い。地方におけるJASCの知名度  
の低さや、有効な情報源の少なさは依然として課

題である。

ところで、地方学生が参加することのメリットとは何か。私は、情報も経験も既に飽和した都内より、地方からの学生が参加してこそ、JASCの可能性と持続性は向上されると考える。地方に住む学生にとって、JASCに参加することは、新しい考え方や価値観に出会い、自分の世界や、将来の選択肢をも広げられると、自分の経験からも確信している。そうした機会を学生に提供することもJASCの本分ではないだろうか。また、そうした学生が地方が増えることは、その大学にとっても、地域にとっても喜ばしいことだろう。今後、様々な地域から一人でも多くの学生がJASCに参加し、ここで出会いと挑戦の機会を得て、そして、自分自身のみならず自分の大学や地域にその成果を還元してくれることを心から願う。

途方もなく長いと思われた一年間も、あっという間に終わってしまったが、振り返ると、ただただ感謝の念に尽きる一年だった。54人の素晴らしい参加者たちとこの1ヵ月を過ごせたこと、そしてアメリカ側の8人、日本側の7人の実行委員とこの一年を共にできたことは、自分にとって本当に幸運だった。特に、実行委員たちと、分科会のメンバーには感謝してもしきれない。

最後に、62回開催のために、ご尽力いただいたすべての皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。関西での広報活動や選考の実施にご協力いただいた同志社大学アメリカ研究科の皆様、亀田尚己教授、立命館大学国際部の皆様、他大学関係者の皆様、国立京都国際会館長の天江大使はじめ、御厚意でJASCにご支援や、ご助言をいただいた皆様、そして関西在住アラムナイの皆様、本当にありがとうございます。実行委員として至らない点もありながら、熱心にご指導いただけたことは自身の今後にも大きく影響すると確信しています。

学生たちによって、この会議の存在意義や、成すべきことは問われ続けている。今後も最高の会議を目指して、その問いに挑み続け、改善し続けてほしい。今夏1ヵ月に起こった、70人の70通

りの経験が世界の新たな架け橋となり、また今後とも、日米学生会議が日米、世界の架け橋として、多くの学生の挑戦の機会となることを切に願う。

### 高田 修太

日米学生会議とは、何を得られるのだろうか。そして、日米学生会議とは、何なのか。自分にとってどんな意味があったのか。これらは、参加者であった去年からずっと自問自答していることである。そして、数多くのJASCerが自問自答していることでもあるだろう。私自身は帰国子女でもなく、留学経験もなく、英語もままならなかった学生であった。であるから、英語やアメリカ文化をはじめとするたくさんの「未知」を経験したため、「何を得たのか」という質問には、私自身の経験を答えることは可能だ。では、果たしてそこから、JASCとは何か、という問いに答えられるであろうか。

先述したように、私にはアメリカに対するバックグラウンドは何もない。大学での専門も工学であるし、英語圏に住んでいたこともない。だから、この会議を通して沢山の未知なる知識を得ることができた。たとえば、それは「日米安全保障」や「沖縄問題」に始まり、「リーダーシップ」「語学力」「人間関係」など、多種多様なものだ。そして多くのものに興味を持たため、会議後も進んで学習をしている。これは私にとっては大きな進歩である。理系の学生は日本の大学では学ぶことが偏りがちで世間に興味を持たない、とも言われている中で、理系とは程遠い内容を学ぶJASC。おかげで、私の部屋の本棚は理系とは程遠いものとなってしまった。また、私は「自分なりの」リーダーシップを学ぶことができたのではないかと思っている。分科会をコーディネートする実行委員として今年は取り組んだのであるが、英語というディスタバンテージがある中で、いかに自分がコミットできるか、そして参加者の声を引き出せるか、どのように議論を進めるか…といったことに頭をひねった時間こそが、私にとって財産であったといえよう。分科会パートナーである Mariama と

## 第5章 参加者の声

協力し、衝突しながらも作り上げた「社会起業家」分科会は、私のJASC中の家族のような存在であった。

会議を通じて学んだ最大の要素は、ひとりでは何もできない、ということである。ありきたりのことではあるが、自分がいかに多くの人々に支えられているか、そして依存して生きているか、ということを感じ、ますます感謝しなくてはならないな、と思っている。英語にしても、拙い英語を聞き取ろうとしてくれるアメリカ側参加者、そして助けてくれる日本側参加者、また、誰でもチャレンジを喜んで受け入れる精神。このような助け合いの精神こそが、またJASCのひとつの魅力でもあった。

ではJASCとは何なのか。なぜ存在するのか。この問いに今一度立ち返ってみる。いくら日米関係が現在危ぶまれているといっても、もはや戦前戦後の日米関係改善という側面は薄れているのは間違いない。それでもなお、このプログラムが存続する意義、それは、私は「未来への投資」なのではないかと思う。この年齢で70名もの国籍の異なる学生と1か月間共同生活をし、何かしらストレスを感じたり楽しんだり学んだり、様々なことを体験する過程を通して、学生を少しでも成長させる機会。そしてそれを共に終えた学生たちの、JASC卒業後のつながり。そういったものが現在のJASCであり、未来の日本への投資となっているだろう。この仮説が証明されるのは数十年後だが、実際に自分がこの仮説を証明しなくてはならないと考えている。そして、数多くのJASCerもそうなってほしいと心から強く願っている。

### 高橋 亜矢

JASCが終わり、日本に帰ってきてからすでに1週間以上が経過した。日常に戻り冷静になった今はじめて、JASCがいかに「非日常」だったかを実感している。その「非日常」の経験を、いまだに私は整理しきれていない。振り返れば、春合宿から今日までの4か月はあっという間だった。けれど、あっという間に感じる日々も、一日一日を

振り返るとたった4か月の間に起ったこととは思えないほど濃密で刺激的な日々だった。

改めてこの4か月を振り返ってみると、JASCとは挑戦の場であり、自分と向き合うための時間であったのだと思う。4か月の間、チャンスはどこにでも転がっていた。フォーラムや講演会など貴重な話を聞く機会がたくさんあり、個人では訪れることができない場所へ行くことができた。目標を決めてそれに対し真摯に取り組む人、他人と理解しあうことを諦めない人、もがきながらも努力し続ける人、そんな尊敬できる69人の素晴らしい人に出会い、語り合うチャンスが与えられた。そして、常に誰かの挑戦を歓迎し、人の考えを受け止め理解しようとする姿勢が空気に表れていたように思う。

しかし、その与えられたチャンスの一つ一つを自分がどれだけ真剣に受け止め、挑戦してこられたのだろうかと考えると、悔しさがこみあげてくる。特に本会議の一か月間には、普段見ないふりをして自分の弱い部分や逃げていた壁に何度もぶつかった。私は自分の自覚と意志の足りなさから、多くのチャンスを逃し、受け身に回ってしまっていたように思う。言いたいことや聞きたいことがあっても、言葉を飲み込むことのほうが多かったし、挑戦することを諦めて楽なほうへ逃げた場面もたくさんあった。英語の能力や知識が足りないことに対する悔しさだけでなく、そんな自分の姿勢に対する悔しさが大きい。

けれど、悔しさが残ったことはマイナスだけではない。自分と向き合い弱さを自覚できたからこそ、心から尊敬でき刺激してくれる素晴らしい人に出会ったからこそ、そんな風に自分も変わりたいと本気で思い、悔しさが残ったのだと思う。JASCで出会った人たちから、これから私が変わるための課題をたくさん出してもらった。この悔しさを忘れないで課題を一つ一つこなしていくことで、私も変わっていけるだろう。そういった意味で、JASCは私にとってまさしく「life changing summer」であった。2010年の夏を私にとって特別な夏にしてくれたこと、私に大きなきつ

かけをくれたこと。JASC で出会ったすべての人に心からの感謝を伝えたい。ありがとう。

### 高橋 央樹

実行委員として活動してきた一年間をふと思えば返すたびに、苦しいこともあったが、自然と笑顔に戻る自分がある。たくさんの人々に支えられながら、走り抜けてきたこの一年は私の中でかけがえのないものの一つになっている。

初めてアメリカ人と一か月間を共に過ごし、私に大きな変化を与えた日米学生会議を自分の手で作り上げてみたい。そんな思いから第62回日米学生会議実行委員に立候補した。最初の頃はそんなに仕事もないだろうと安直に考えていたが、広報、報告会、選考、春合宿などなど、毎日新たな仕事が目の前に存在し、夜通しでスカイプ会議をした日もあった。何よりチームとして活動する実行委員会では、一人の仕事が他の全員の仕事にも影響するため、全体に迷惑をかけないために全力を尽くさなければならなかった。チームとして活動した経験があまりない私にとっては、他の実行委員に迷惑をかけることも実際多く、自分の不甲斐なさにもどうしようもない苛立ちを感じることもあった。実行委員というレンズを通して見える自分は、あまりにも未熟なことに気付き、ただただ悩む時期もあった。

そんな時も助けてくれたのは、他にもない61回参加者や他の実行委員だった。自分が足りない部分を率直に伝えてくれる人、ただただ自分の愚痴を聞いてくれる人、いつの間にか実行委員の仕事を忘れさせるぐらい笑わせてくれる人、多くの友達に支えられながら、忘れかけていた日米学生会議への想いを取り戻していった。悩んだ時にはいつでも真摯に相談してくれるような素晴らしい仲間と巡り合えるような会議をまた創りたい、私の中で確固たる自覚が根付き、いつの間にか実行委員としての仕事は苦でなくなっていた。また本会議中も、自分の最大限の力をぶつけようと心の中で決心し、一か月の本会議に臨んだ。

本会議が始まると、あっという間に毎日が過ぎ

ていった。毎日夜遅くまで話合う実行委員のミーティング、日々の雑務などこなす仕事が多かったが、実行委員同士互いに助け合いながら一つ一つこなしていった。ただ日々を過ごす中で、本当にこの会議で良かったのだろうかと自身に問うたこともあった。しかし最終日に空港で、互いの別れを惜しみながら涙を流す参加者を見ていて、実行委員として活動して本当に良かったと心から感じることができた。

本会議が終わり、この一年間を振り返ると普段できない多くの経験を積み、私自身確実に成長できたと感じている。また同時に今まで自分を振り返ることが少なかった分、反省や後悔も感じている。しかしこの会議で多くの人に支えられながら生きてきた自分という存在を再認識し、素敵な仲間と出会えたこの日米学生会議に本当に感謝したい。この経験が私自身の将来にどのように関わってくるのかということはまだ分からない。ただここで得た仲間とともに、私の人生を今後も歩んで行きたいと思う。

最後になりますが、今までお世話になった国際教育振興会の皆様、アルムナイの皆様、多大なる支援を頂く皆様に、心からのお礼を申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。

### 竹内 智洋

私が日米学生会議（JASC）を知ったきっかけは参加者であった知人だ。彼女から様々な人間と出会うだけでなく、自分を見つけることにも繋がったと聞いた当時高校生の私はJASCという未知の世界に憧れを抱いた。そして今年、2度目の挑戦にしてやっと未知を経験するチャンスを掴んだ私はこの会議に2つの目標を持ち臨んだ。

1つ目は自分を試すということだ。

今まで興味を持った事にはとりあえず手を出してきた性分、近年過去を辿るとそれらの経験から得た物はあるのだろうかと不安になっていた。そして、私はこれをJASCという最高の環境、仲間がそろった舞台上で確かめようと考えた。実際

## 第5章 参加者の声

JASCでは毎日このチャンスがあった様に思う。日々行われた分科会ミーティングやフィールドトリップに始まり、ワシントンDCで開催された日米安保フォーラムでのスピーチ、そしてサンフランシスコで行われたファイナルフォーラムの代表スピーチ。自らの考えを公共に表現する度に自分をしっかり見つめなおす機会となり、仲間から受ける日頃のフィードバックから『自信』をもらいつつも今後の『課題』も明確になった。

2つ目はアメリカで会うJASCer全員、1つずついいところを見つけ自分のものにするというものだった。そしてこれは難しくなかったと振り返り思う。アメリカに行った私は本当にすばらしい仲間と出会う事が出来た。私が最も驚いたのはJASCという場では国境を越えた者同士がいかに早く溶け合えるかという事である。誰もが自分を主張する以上に残り69名のJASCerを知ろうとするため、1日目にして周りには大親友の様に並んで話すジャパデリとアメデリが大勢おり、この中で私は一人一人とまじめなディスカッションをし、時折ふざけ、いつしか全員に対し『信頼関係』を築いていた。そして、一ヶ月共に生活する中で日々、私は参加者の良さに気がつき、同時にこれを自らのものにしようとして努力した。まだこれからというところだが、意識して取り組む事は出来たのではないかと思う。

学生の力というもの一般的に大人のそれに劣るものと解される場合が多い。しかし、一ヶ月を通し、私は「それは違う！」と胸を張って言える。学生は大人と異なり、信頼さえあれば心のうちを素直に明かすことが出来る。私はJASCを通して、成長するきっかけ、『自信』、『課題』を得る事が出来た。また、国家間で今までタブーとまで考えられていた問題も学生間の『信頼関係』があれば、熱く議論する事の出来る議題へと変わるという事も体験した。今夏、私がした経験は今後人生において糧となり、私を励まし続けるだろう。62回日米学生会議は幕を閉じるが、私は自らがしたこの最高の舞台を63回にも作り出すため、実行委員として貢献していきたい。

## 中澤 耕己

JASCは自分にとって、これまでにない類の経験だった。

例えば高校まででは、部活やクラスなどの集団で何かに取り組み、そこから一生忘れられない経験を得ることが出来た。JASCも同年代の集団が何か共に取組み、何かを得るという点でこれらに似ているし、間違いなくいずれも自分の中では大切な経験だが、それらと比べた時のJASCの一番の特徴は、そこで出会う人であると思う。日米両国から集うJASCerとの出会いであり、JASCだからこそ会える人との出会いであり、アメリカという異文化との出会いである。出会いが自分自身に与えるインパクトの大きさという点で、JASCは他のどのような経験にも勝ると思う。

この1カ月を振り返ってみれば、質の高いJASCerとの出会いが現時点ではやはり最も印象的であり、自分に影響していると感じている。他のJASCerの話すこと、考え方、問題に対する姿勢、人生に対するスタンスなど、それまでの自分の中には全くなかった可能性が手の届く範囲に無数に存在していたあの環境は、間違いなく1カ月間の自分の成長の土壌となったし、今となっては夢のようですらある。この1カ月間、様々な「出来ないこと」に直面した時、JASCerの時に温かく時に斬新な言葉や、無言で挑む背中に励まされながら、困難をただ消化するのではなく、新しい方法で、それも自分の足で乗り越えたという感覚が、個人的には非常に強い。表現するのがとても難しいが、参加者それぞれが全く異なる壁に挑戦しており、時にそれに挑戦することすら辞めたくなる中で、支えになったのは仲間の何気ない言葉であり、温かさであった。そして、自分なりの答えを出すことができたし、自分としてはその答えの正当性は別として非常に清々しく、納得がいつている。自分にとって今回のJASCの「世界の問題を、私たちの課題へ」というテーマは、世界の問題を噛み砕いて内在化し、それを自分なりの形で消化し形にするということであったように思う。副題の「異なる個の生む衝突と共鳴から」という

のは、必ずしもプラスとマイナスのような正反対の個が衝突するのではなく、それぞれにくせのある独特な個性の出会いが自分にとっては貴重な「衝突」だったし、そこから成長へと向かうことが出来たことそれ自体が「共鳴」の一つの形なのだろうと、振り返ってみて感じる。

これからも 62nd JASCer として人生を歩んでいく中で、こんな 69 人の同世代がいるんだという素直な驚きに支えられることも多いだろうし、この経験や出会いを他の誰とも違う、自分なりの形でこれからは活かすことが 62nd JASCer なら出来ると思う。

### 中村 真理

JASC が終わりもう 2 ヶ月が経とうとしているのに、JASCer 達の表情やあの日のあの場面は今までと変わらずに私の時間の中にとっても自然に流れ込んで、またそれぞれの場所に戻っていく。こうやっていつまでも、JASCer として生きてきた 1 年数ヶ月の間の諸々への後悔が絶えないことは、次のステージへ進まなければいけない私を苦しめる。

「世界の問題を私達の課題へ」。1 年前、事務所では何日も、実行委員が朝から晩まで顔をつき合わせて決めたとても前向きな理念だ。だけれども実行委員として必死に活動をした 1 年の間、幾度も懐疑的になってしまう瞬間があった。世界の問題 - 文字通りの「世界」だけでなく身近な不和から、世の中の格差から、worldwide な争いまで - は結局は大人たちの利害関係の調整であって、学生が力を尽くしたところで何かが良いようになるのだろうか。多くの学生たちが夢を描き、理想を語り、友情を育んだ JASC で、私は何度も立ち止まりそうになりながら、それを許す余裕は無く、また前に歩き出すということを繰り返した。

Life Changing Experience' と謳われる JASC は、いつしか気づかぬうちに、私の 'Life' そのものになっていた。この 1 年間、私は JASC を通して人に出会い、人と関わり、世界に気付き、強く怒りや悲しみを持ち、泣き、諦めかけたものを信じ、

感動し、仲間と笑った。それは決して、達成感に溢れきり輝くばかりのものではないが、人の醜さと美しさが、そして人と人がつながる時に生まれる苦しさ、辛さ、明るさ、温かさがこれでもかというほどに詰まった、誇るに値するものであると自負している。そしてもう既にそうであるように、私はこれらを今後一生かけて無意識に回顧し、後悔し、反省し、未来に生かし続けていくのだろう。それほどまでに莫大な時間と労力をかけて向き合った JASC が、私は大好きなのだと思う。1 年間で最も苦勞した仕事は担当の選考だった。

どういう会議にしたいのか、そのためには何を問い、どの様な基準を設けるべきなのかといった 8 人での議論を半年がかりでまとめていく難しさ。作業に追われ毎日事務所に通った 2、3 月、分刻みのロジに気が張り詰めながらも、150 人の受験者一人一人の背後にある人生を懸命に掴もうとした面接、そして選考合宿。春合宿では、この 36 人が一つの空間にいるということが奇跡のように嬉しくて、感動が涙になった。日常を、世界を照らしていけるのは、私達学生も含めた「人」なのだと思えた。2010 年の夏を共有した 62 回会議実行委員の皆、参加者の皆に心からの感謝を伝えたい。本当に「ありがとう」。

### 生板 純一

私にとって第 62 回日米学生会議は、とことん考えられる場所であった。帰国子女である自分の一面から、自分のアイデンティティを再確認したいと思い、たくさん考えた。就活生である自分の一面から、自分の興味、関心、将来のビジョンなどについてたくさん考えた。JASC に参加する以前の自分は、物事をここまで突き詰めて考えたことはなかった。得た知識や人が言ったことを全てそのまま受け入れてしまうのではなく、「どうしてだろう？」と常にその背後にある意味を追求した。これを繰り返すことによって、自分の視野が広がったと思う。

JASCer の面白さは、皆それぞれ自分の視点を持っていて、その視点に至った根拠などを語れるところにあると思う。どんな話をしても様々な意

## 第5章 参加者の声

見が飛び交って、非常に面白く、自分の考えを深める助けとなった。

日米学生会議とは文字通り日米の学生の交わり場であるが、日本と米国では、文化、生活習慣、食生活、使用言語等、様々な面で異なっている。まずその違いに背を向けず、認識することに努めることが大切であると考え。様々な違いがあることは当然のことであり、その違いの先に見える自分との共通点を見出すことによって初めて理解が生まれると思う。JASCerは常に自分を表現しようと努力し、また相手との違いがどこから来るのか理解しようとしていた。その結果、参加者間の理解が深まり、異文化交流がなされていたと思う。

日米学生会議に参加するに当たって、皆それぞれ違う理由や動機で臨んでいる。JASCは、そのような一人ひとりのニーズを満たしてくれる場所であると強く感じる。しかしそのニーズは簡単に満たされるものではなく、一人ひとりがその目標に向かって、もがき苦しむことが大切である。そうすれば、それを支えてくれる仲間がいて、時には導いてくれる仲間が必ずいる。事前活動から本会議までの4ヶ月間、私は自分や他の参加者と正面から向き合えない時もあり、苛立ちを覚えることもあった。様々なことに納得がいかなかったり、投げ出してしまいそうになったりしたこともあった。そのような一つ一つの困難に直面する度に私は成長できたと思う。日米学生会議での経験を通して、私は何か言葉にできない大きなものを得た気がする。何年か経って振り返ったときに、この素晴らしい経験を上手く言葉にできるようになるのかもしれない。その日が来るのを楽しみにして今後の人生を精一杯生きて行きたいと思う。

### 庭野 啓太

今回の日米学生会議に参加するにあたり、ひとつ心がけたことがあった。自分の思いを相手にぶつけるとのこと。第62回日米学生会議のテーマは「衝突と共鳴」で、自分の思いをぶつけ、「衝突」という壁を乗り越えてみたいと思った。そのため

には、ためらわない。そんな思いで参加したつもりだった。それでも、会議を通じて、その姿勢を貫くことはできなかったように思える。分科会では、自分の意見と議論の方向性にじっくりいかななくても、妥協を重ねてその場の雰囲気流されてしまったり、ただ相手の意見に同調するだけ、といった楽な選択を選ぶことが多かった。分科会の進むべき道が定かでないときに、しっかりとインシアティブをとって自分の考えを伝えるRTメンバーの根気、頭の回転、発言の強さには頭があがらなかった。

一方で、会議を通じてこれからはずっと続く友達というかけがえのない財産を得ることができた。本当にいい人たちばかりで、直前合宿で不安になって流した涙は、どこへ行ったのやらという感じだった。全員と十分仲良くなれたわけではないが、JASCで同じ経験をしたことで強い一体感と特別な感覚を持つことができた。本会議終了まで秒読みになったサンフランシスコサイトの街を自転車で駆け抜けたときの気持ちも、最後のリフレクションでみんなと流した涙の感覚も覚えている。この感覚をいつまでも忘れずに持つことができれば、と思う。

JASCでは、恥ずかしがりやな自分でも、自分らしく仲間と楽しむことができる貴重な一ヶ月を過ごすことができた。チェアの言うように、これから自分たちが出て行く世の中は厳しい。自分に自信を失うこともあるだろうし、人間を信用できなくなることもあるかもしれない。そんな時に、ともに一ヶ月を過ごし、助け合い、お互いを認め合ったJASCのメンバーがいることを思い出したいと思う。

### 橋本 遥

・きっかけとしての日米学生会議

2009年11月末。私は長い期間を捧げ、私に多くのことを与えてくれた一つの役割を終えて、新たなものへの挑戦を模索していた。自分に足りないものは何か、必要なことは何か、何をすればそれを補ってくれるのか。日々それを探していた。

といっても何かやりたいことが明確に見えていたわけではない。いくつもある興味の対象に関して、それを実際に体験してどんなものかより深く知るための活動がしたかった。何に熱中できるのかわからなかった。一つのことには没頭することが他を見えなくしてしまいそうで、それを拒んでいた。だからこそ興味のあることすべてを経験してみようと思っていた。そんな日々の中で見つけた活動の候補の一つとして出会ったのがJASCだ。JASCの説明を聞いたときその内容が面白そうだなと思ったが、正直当時私が渴望していた要求が直接的に得られるものではなさそうだなと思った。しかし間近にそれを体験したことはない私の勝手な判断で可能性を切り捨てるのはいかなものか、第一の要求を満たすものでなくとも今の私に思い浮かばない何か他のものを与えてくれるのではないか、そう思い、始めなければ始まらない、と応募してみたのがそもそものきっかけだった。

知ってもらうには伝えることが必要だ。しかし的確に伝えることは難しく、正確に理解してもらうことはもっと難しい。何かを伝えなければ、その相手の思考は何に基づき、その背景はどのようなもので、どのような思考のマナーを有するのかを知る必要がある。自分の得意とすることをどんどん伸ばせばいいというものではない。だから自分の関心と一見関わりがなさそうな分野を知らないでいるのは賢明ではないとの思いの下、敢えてそういった分野に関わっている人の考えを聞くために飛び込んでいった。これが、私がJASCに参加する意義の一つだった。

そんな思いをもって参加したJASCは私に数々の衝撃を与えてくれた。自分の興味を追求し、それを深めている人がいる。そのために多くの活動に関与し、知識を吸収しながら自らの理論を強固にし、それを発信する練習を重ねている人がいる。その事実には圧倒された。社会への意識の欠如、組織感覚の重要性、同志の存在の大切さ、知識・経験の乏しさ、自己の思考の脆弱さ。自分の至らなさを思い知らされた。私は何がやりたいのか、何で自分を活かせるのか、私は何を求めているのか、

そもそも私はどんな存在なのか。私にとってのこの至上命題に向きあわされ、悩まされ、たくさん考えさせられた。見えてきたのは社会の広さと社会という土壌の価値の高さ、自分の前にある選択肢の豊富さとその可能性の大きさ、掴もうとすればそれを掴めるということだった。

「目の前にあることを一生懸命にやりなさい。」そうすればそこから繋がってあれもこれもやりたいことができる。道はおのずと開かれていく。

そんなことはずっと前からわかっているつもりだ。本会議中にもある方からこのお言葉をいただいた。だが頭で考えることは簡単でもその基本的なことを見失わず貫徹し遂行することは簡単ではない。強い信念と持続力、焦りに耐える忍耐力が必要だ。しかしこの言葉の意味するところが自己の理論形成において一つの核心を突いていることは確かである。一つのことを集中して見てみたときにその内実を知ることができ、そこから次へのリンクが見つかる。その繰り返して複数のことを網羅的かつ深く知ることができ、やっと自分が活用できる手札として備えることができる。それが自らの考えの根幹を成し、論のよりどころとなる。先ず隗より始めよとはまさにこのことだと痛感した。

JASCでの出会いは、どれも刺激的で衝撃的だった。多くの多様な声を聞き、JASCerたちと語り合い、悩み、他者とも自己とも衝突することができた。JASCにはそれをありのまま受け止めてくれる人、環境、雰囲気があった。JASCは私に考え抜く機会と多くの新たな気づきを与えてくれた。そして目の前のことから始めてみる勇氣、自分の世界を広げていく多くのきっかけも与えてくれた。自信を持って言えるのは、こんなにも素晴らしいものを与えてくれる、人との繋がりはなにものにも代え難いということ。私はJASCをきっかけに次のステップへと挑戦していきたい。

JASCerとJASCを通して出会えたすべての人に心から感謝して止みません。

敬意を表して、ありがとう。

### 細井 駿

私が在籍する東海大学から日米学生会議への参加が初めてであったことから、参加することが決まって教授たちはじめ多くの大学関係者から沢山の応援メッセージを頂いた。私個人としては昨年参加した日露学生会議での経験から、留学したことのあるアメリカの学生とも二国間関係についてのディスカッションを通じて相互理解を深めたいという理由から応募したのだが、次第にそれは個人の目的だけではなく、大学の代表として今後も日米学生会議参加者を輩出できるように会議を成功させなければならないという責任へと変わっていった。

5月に始まった事前活動の中でも、特に印象に残っているものは防衛大学校と沖縄での研修である。基地建設について賛成派、反対派、異なる観点、レベルでの考え方を聴くことができ、日米関係を語る際に必ず出てくる沖縄米軍基地問題を自分なりに考察、咀嚼する貴重な機会となった。他にも、分科会フィールドトリップやOB/OGとの交流を通して、普段は話を伺うことができないような方と実際に会う機会を持てたことはまさに日米学生会議の大きさとその歴史の長さのためだと改めて会議に参加できたことを光栄に感じた。

アメリカでの本会議中の出来事に関しては、留学経験もあることから渡米すること自体にはあまり新鮮さを覚えなかったが、1ヵ月間生活をともにしていく中でアメリカ側参加者とも本当に深い関係を築くことができた。日本側参加者からも事前活動中には見えなかった個々の良い部分を日々沢山発見することができた。「1ヵ月間ただ一緒にいるだけでは友人関係で終わってしまうが、学生会議のように難しいトピックを議論することで関係はもっと深いものになる。」誰かがこんなことを言っていたが、本当にその通りだと思う。こんなに素晴らしい関係を築かせてくれた日米学生会議に感謝したい。

最後に、私が日米学生会議に期待することは、もっと様々な大学の学生が会議に参加できるような環境を作ることだ。優秀な学生が集まることは

もちろん大切なことであるが、内向き傾向にある日本の若者を積極的に海外と繋がる機会を持たせることは日本の将来にとって非常に重要であり、異なるバックグラウンドの人間が集まることで議論も面白いものになるはずである。日米学生会議はそれを経験できる最適なプログラムであると信じている。私は参加者として日米学生会議に関わったが、「Once JASCer, Forever JASCer」としてできる範囲で貢献していきたいと考える。今後の日米学生会議の発展に期待したい。

### 松下 マエス

直前合宿にてJASC メールポストに手紙を投函すれば、次の日届けてくれるJASC内システムを知った。住所は「名前」。はじめはとても覚えられなかったが、いつしか全員分が言えるようになった。それだけではない。最終日に全員にJASCメールを書こうとしたとき、70人一人ひとりとのエピソードを鮮明に思い出すことができたのだ。

このひとつの成果を取ってみても、「JASCの一員でよかった」と言える理由である。帰国してまじったことといえば、弟にJASCを勧めたことだったし、一週間後JASCリユニオンでは、会う人会う人に「久しぶり、会いたかった！」を連発したくらいだ。

もちろん、JASCの経験を美化するつもりはない。もしかしたら一年後には疎遠になって、何人かの名前もおぼろげになるのかもしれない。それでも私自身に起きた変化は、ずっと私と生きていくと思う。その限り、JASCは一生の宝物である。

変化その①。他人と比べることで、自分を知ることができた。たとえばレクチャーを聞くにしても、今までなら聞いてそれで終わり、「私の感想」のみで満足し、それが普通の考え方だと思っていた。レクチャー内容について後ほど仲間と語ってみると、意外とみな受け止め方や考えることが全然違う。それは個々の問題に対する意見でも、生き方などの広いトピックに関しても同様だった。

私はそういった話題に「巻き込まれる」形で、(恥ずかしながら)初めて人の心の奥深さを知り、集団をまとめ上げる難しさを知り、そして相手を理解する楽しさを学んだ。他人と比べるため、つられて自分の意見を声に出してみると、「私ってこんな人だったのか!」と衝撃的大発見の数々……。変化その②。私の役割を疑問視するようになった。EC選挙の際、来年就職をする身なので立候補する選択肢もなく、迷いなく投票者という役割に徹していた。しかしみなスピーチを聞くうちに、私だったらどのように話すだろう、この一ヶ月でどのように見られ、評価されたのだろうかという考えが浮かんだ。浮かんだ瞬間、怖くなった。ただただ考えなしに毎日を過ごしては、失うものも少ないが、得るものも少ない。だから、もっとグループのためにできることを考え行動するべきだと思った。

多くのJASCerにとって、私の「大発見」は幼稚すぎて、当たり前なことなのかもしれない。しかし、まあ、マイペースな自分は無理して変えずに、楽しく次に進もうと思う。これが次の夢へのスタート地点。卒業する前に最後の学生生活を謳歌し、社会に出てスーパーな経験を共にしたJASCerと一緒に、日本を、世界を変えることをやってみようじゃん!

### 丸山 綾子

JASCの思い出を数えればきりが無い。夜が更けるまで、お互いの人生や大切にしているものについて本音で語り合う。幅広い社会問題について、利害関係のない学生にしか出来ない踏み込んだ議論を交わす。アメリカという国をざらりとするような違和感も含めて生身で感じ、それをアメデリにぶつけて話し合う。JASCという場でしか味わえない貴重な経験が確かに出来たと断言できる。

そうした私にとってのJASCの魅力を踏まえたうえで、尚言わなければならないことがある。1ヵ月を振り返って「心から楽しかった」と何の迷いもなく言えるかどうかといえば、正直に言って答えはノーだ。私にとって本会議は、自らの未熟さ

や弱さを痛感することの連続だった。語学力や体力のなさに憤り、集団の中で果たすべき役割を見失い、自分のパーソナリティをうまく表現できずに苦しみ・・・思った以上のstruggleに見舞われて、途方に暮れた。本会議への参加にあたって、「皆にとってJASCがよりよい場所となるために自分の資質を生かして何が出来るか」に意識を集中させていただけに、自分の資質の乏しさを実感させられる事態はかなりショッキングだった。

帰国した今も、そうしたstruggleを克服出来たかは心もとない。しかし、今の私に焦りや失望はない。苦さの残る経験だったとしても、現時点での自分が全力で悩み、全力で取り組んだ結果としてそれを受け止め評価すること。そこから得た反省を、今後の自分の成長につなげる。本会議は終わったが、これからの人生でそんな挑戦を続けることは出来る。才能と個性にあふれた、一癖もふた癖もある日米の学生が集まるJASCでなければ、これほどのstruggleには出会えなかった。恐らく多くのJASCerも、本会議を通じて様々な悩み、それぞれの壁にぶつかったことと思う。しかし一人ひとりが苦しかった経験をばねにして、今後もさらにそれぞれの人生で自分を磨いていくことを確信している。自分の限界と現状に甘んじて挑戦を諦めたくなりそうな時、私はJASCerに会いに行きたい。懸命にそれぞれの道を切り拓く皆の姿が、私に挑戦をやめさせないだろう。”once JASCer, forever JASCer”という言葉に胸に留め続け、JASCを将来の自分の礎としていきたい。

### 森田 真弓

日米学生会議はLife Changing Experienceだったのだろうか?私にとって日米学生会議はどのような意味をもつものだったのだろうか?会議が終わって少し時間が経った今でも、これら問いに対する明確な答えは出せていない。ただ、日米学生会議のおかげで多くの素晴らしい経験ができたということは断言できる。

海外生活経験のない私にとって、1ヵ月ものアメリカでの集団生活はとてとても新鮮であり、楽しく、

## 第5章 参加者の声

時にはつらいものだった。

自分とは全く違うバックグラウンドをもつ JASCer、とくにアメデリとの交流やアメリカで暮らすことは、今まで自分に無かった価値観に触れる大きな機会だった。自分には無い価値観やアメリカ文化を知るとはとても楽しかった。このおかげで帰国してから日本という国に対する見方や、身近なものを見方が少し変わった気がする。

話は変わるが、私は英会話が苦手だったため、英語でのコミュニケーションに大きな壁があった。英語で自分の思っていることが伝えられないことよりも、相手が英語で話す内容が理解できないことがつらかった。そしてそのつらさで落ち込んでしまい、自身の問題解決に努力できていない自分にとても腹立たしさを感じた。特に、身近で努力している JASCer の姿を見ていると自分と比べてしまい、さらに落ち込んでしまうこともあった。そんな時、私の話を聞いて助けてくれたのは JASCer だった。自分の気持ちを整理するにはとても時間がかかったが、自分は自分だと割り切り、自分なりにがんばろうと思えるようにもなった。もちろん、努力する JASCer の姿を見て私も立ち止まっていたはだめだ、がんばらなくてはとも感じさせられた。本当に、彼らの存在は私を励まし、向上させてくれた。

この会議に参加して何よりもよかったと感じていることは、69 人のかけがえのない仲間に出逢えたことである。今後、他の様々な経験を積んでいく中で私の人生における日米学生会議の意義は変化するだろう。そしてその中でこの会議が私の Life Changing Experience だったかどうかとも明らかになっていくだろう。

しかし、私にとっての会議の意味付けがどんなに変わったとしても、かけがえのない 69 人の素晴らしい仲間に出会えたことは一生変わらないと思う。

みんなと出会えて本当によかった。ありがとう。

安川 皓一郎

実行委員長として臨んだ第 62 回日米学生会議で

は、本当に多くの事を学んだ。組織のマネジメントの難しさ、大きなプロジェクトを動かしていくシビアさ。そのような実務的な部分のみならず、70 名の学生の代表の一人として振舞う事の責任など、一人で過ごしては決して学ぶことのできない多くの事を周りの人々から学ばせて頂いた。

学生として挑戦できる最後の 1 年として自分自身が決めたこの 1 年間で一体どれだけの進歩を自分が出来たのだろうか？多くの仲間たちが常に声をかけ、励まし合う日米学生会議の生活は温かく、本当に居心地が良いものだ。しかし、実社会は厳しく、時に苦しい事もあるだろう。そのような時、私には日米学生会議の仲間と言う掛け替えのない、苦しい時間を支えあった仲間たちがいる。来年からはやっと社会人となるわけだが、この 2 年間で得た友情を胸にこれからの人生を頑張っていきたいと思う。

「友情、力あり」

山口 寛明

五月、春合宿に始まった JASC は自分にとって紛れもなく、成長と変化の場であった。気持ちの整理がつかない、というほかの JASCer（会議参加者）の声も聞かれたが、自分の思いは驚くほどすっきりとし、整理されている。思うに、JASC という濃度の高い時間・空間は、それぞれが予期しない種を参加者の中に蒔いてくれるのだろう。それを意識するかしないかにかかわらず、それらの種はそこに佇まい、いつか芽吹き、育っていくように感じる。

JASC で私が出た数多くの種を、言葉に直すことは難しくない。ただ、ひとつ、意識はできても言語化できないものがある。五月の春合宿で抱いた思いである。春合宿は、参加者が初めて一堂に会するため、皆の、JASC への encounter となる。私にとっての JASC との衝撃的な「出会い」は、合宿の締めくくりである「リフレクション」にあった。

リフレクションとは、参加者全員が円を囲んで、それぞれの反省、思いや感想を共有する場である。

## 山下 真貴子

JASCの活動において何度も設けられる場であるが、春合宿のそれは今思っても、独特の重い雰囲気包み込まれていた。訥々と語られる言葉の中に、参加者それぞれの人生の一端を見た気がした。それらは、受け止めきれないほどの重みを私の胸に落とした。言葉が発せられないまま家路に着き、翌朝目覚めたときに、高鳴る胸の鼓動が抑えられなかった。なぜそのような変化が起きたのかはわからない。しかし、その日から、自分の所属する共同体の中で自分なりの役割を探し、人々の意識に変化を与えることが自分への日々の課題となった。JASCにおいても、本会議前の準備から、その終わりまで、継続的に自分なりの貢献の仕方を考え、実践していた。

おそらく、私がJASCで得られたいくつものことをはっきりと認識できるのは、日々、自分の「役割」を意識していたからだと思う。自分が分科会でできることは何か、JASC全体に与えられる影響はなにか、JASCで得られたものをどのように将来、活かすことができるのか。そのようなことを毎日考えては反省していたので、自分の能力及ぶ範囲と、至らなかったところを自覚できるのだと思う。そのように自分を駆り立てたものは春合宿のリフレクションであった。具体的に、リフレクションのなにか、ということとはできないが、自分の鼓動に物理的に変化を与えるほどの衝撃や重みがそこにあったことは事実である。それを、JASC早々に私の得られた「種」と呼びたい。

JASCが参加者にとってどんなに大きなものであろうとも、長い歴史を持つと、社会から見れば学生中心のちっぽけな団体に過ぎない。Once a JASCer, always a JASCerとも言われるが、時間が経てば参加者にとってのJASCは小さなものになっていくだろう。それでも、JASC中に植えられたたくさんの種は、意識されるとされないに関わらず、確実にそこに「ある」と信じたい。今は言語化できなくとも、それはいずれ人を動かし、変化させ、社会を変えていくだけのダイナミズムとエネルギーを持っていると確信している。

5月の春合宿から約4ヶ月間、JASCの行事やRT活動をこなし、迎えた本会議。この1ヵ月間で私は何を得たのだろう。そして、私をJASCに受け入れてくれたJASCer達に、私は何か貢献できたのだろうか。その答えはいまだにわからない。現実世界に引き戻されて暫く経つが、本会議の1ヵ月はあまりにも非日常的で、これを消化するには時間がかかりそうだ。

このJASCでは、RT活動やフォーラム、様々なレクチャー等、普通なら経験できないようなことをたくさん経験させてもらった。その中で、今まで目を背けていた自分の実力や現実を突きつけられたのも事実である。自分がいかに何も知らずに過ごしてきたかを思い知った気がする。

また、JASCのメンバーはそれぞれが、自分の専門に対する自負心を持ち、いろいろな問題に対する自分の意見をきちんと持っており、強烈に刺激を受けた。もともと、JASCに参加したいと思った理由の一つに、様々なバックグラウンドを持つ学生と関わり、視野を広げたいという思いがあったが、JASCを経験し、私は彼らのように、まず自分の専門にもっと貪欲にならなくてはいけないと思った。

JASCは終わったが、この決意を胸に精進していきたい。そして、このJASCで、素晴らしい友人達に出会えた幸運に心から感謝したい。

## 山田 晃永

高校生の頃から漠然と「日米学生会議に参加する」と思っていた。なぜ日米学生会議なのかは分からない。直感的に惹かれていた。第一次選考締め切り当日に応募を決めた際も、アメリカ開催の年に参加する最後のチャンスであり、興味のある分科会があったからという以外の志望動機が思い浮かばなかった。おかげで個人面接は、類まれな出来の悪さであった。私の日米学生会議の思い出は、「グループ面接のメンバー楽しかったな」で終わるはずだった。だから、「第二次選考結果通知」の「合格」の二文字は信じ難かった。

## 第5章 参加者の声

運良く参加する機会を頂いて良かったのだろう。もやもやしたまま、春合宿、防大研修、沖縄研修、数々のフィールドトリップ、直前合宿を経て、あっという間に迎えた本会議。5年ぶりのアメリカ。言葉の壁、文化の違いに戸惑いつつも乗り越えて成長していく人が羨ましかった。一方、私は3年生の夏という進路を決める上で重要な時期に敢えてアメリカに来たのに、「楽しかった」で終わるのはと不安になった。

しかし、分科会のおかげでそうならず済んだ。第3サイトに移り、ファイナルフォーラムが現実味を帯びてくるにつれ、皆の不満が溜まりだした。分科会で唯一の帰国子女であった私は、両国の参加者の愚痴を聞くことになり、「地域再生だけは順調に進んでいる」というそれまでの考えは自己満足であったと気が付いた。それからは必死だった。ファシリテーターとして全員の理解度に細心の注意を払い、適宜通訳をし、さらに自分の意見も言う。時間が無いのに皆が集中しない時は、Female Naziと呼ばれるほど厳しい態度も取った。喉を酷使し続けて迎えたファイナルフォーラム。声はガラガラだったが、立派なスライドも完成し、10分間のプレゼンテーションに8人の精一杯の頑張りを詰め込むことが出来たと思っている。全員の満足する物を形にするためとはいえ、私が議論を仕切ったのも結局は自分勝手な振る舞いだったのかもしれない。それを許してくれた分科会の皆にお礼を言いたい。

“JASC is a life changing experience.”と良く言われるが、私にとってアメリカで過ごした夏の1カ月は、自分の弱み・強み、長所・短所を知るきっかけであり、新たなスタート地点だと考えている。周りから強く薦められ、来年度の実行委員をすることになった。なんとなく惹かれていた日米学生会議だが、不思議なご縁があるのかもしれない。謙虚な気持ちを忘れずに、1年間精一杯取り組みたい。

米本 大河

“Life Changing Experience” この言葉は実行委

員が選考過程から春合宿、さらには渡米前の直前合宿まで一貫して口にしてきた言葉です。「日米学生会議（以下、JASC）を通してきっと人生変わるよ!!」一見大げさに聞こえますが、私はこの言葉に全くの疑いを感じませんでした。なぜなら、JASCの持つ約70年という歴史の重みや初めて訪れる本会議開催地アメリカ、一ヶ月間の共同生活、英語でのディスカッションなど、どれをとってもエキサイティングな初体験だったからです。しかし事前活動や本会議を通じて気付いたことは、“Life Changing Experience”とはこういったことから生まれるのではないということです。「人生が変わる」とは、JASCを通して出会う仲間が自分に与える「思考の変化」なのです。私の思考が、春合宿から本会議終了までの4ヶ月間で明らかに変わっていくのがわかりました。出会った仲間は、誰もが个性的で、博学多才、かつ努力や考察を怠らない優秀すぎるほどのメンバー達でした。JASCでは普段絶対にできないような様々な貴重な体験をします。しかしそれら体験が他の仲間にはどう見えているのか、自分とどういった点が異なるのか、語り合い、共有する中で自分の価値観との対話をしました。しかし、そんな優秀すぎるメンバー達と自分を常に比較するがゆえに、しばしば自分を見失うことがありました。自分はこのメンバーに何が還元できるか、70人の中で自分にしかないものとは何なのか、悩む日々が続きました。しかし、悩む場所には必ず改善点とチャンスがあります。私は本会議を通じてそういったチャンスをいかせた部分と、残念ながら改善できなかった部分がありました。しかしながら、それに気付けたのはJASCというすばらしい環境と仲間との出会いがあったからに他なりません。それゆえ、会議が終了し、仲間と遠く離れてしまった今、再び出会う時までにはそれらを乗り越えることこそ、彼らに対する恩返しだと考えています。私にとって人生は変わり始めたばかりです。彼らの面影を胸に常に努力をし続けたいと思っています。そしてこれこそが私にとっての「Life Changing Experience=思考の変化」なのです。最後に、この場を通して、

会議を通じて出会えた仲間達と、本会議をご支援いただいた方々、そして私をこの素晴らしい第62回日米学生会議のメンバーとして採用していただき、誰よりも尊敬してやまない実行委員の8名に

心からの感謝の気持ちを表したいと思います。本当にありがとうございました、そして次回会う時までにもっとビッグになることを誓います!!



写真 上；ワシントン D.C. にて 下：春合宿にて日本側参加者と留学生と



